

带状疱疹

県感染症情報センター

声なき感染症を知る

◆91◆

水ぶくれを伴う赤い発疹が带状に現れる皮膚の病気「带状疱疹(ほうしん)」。加齢や病気で免疫が低下した時や、免疫が低下するような薬剤を使用した時に起こりやすい病気です。带状疱疹の合併症の一つである神経痛は長引くため、生活に支障をきたして困る方も多くいます。今回は带状疱疹についてお話しします。

▽幼少期の水ぼうそうでウイルス潜伏

带状疱疹は、子供のころに感染した水痘(水ぼうそう)によって身体の中に潜伏していた、ヘルペスウイルスの一種「水痘带状疱疹ウイルス」が原因の感染症です。加齢、疲労、ストレスにより免疫力が低下した時に発症しやすいです。水痘に感染したことのある人であれば、誰でも带状疱疹になる可能性があります。

▽加齢とともに増加

日本では、1年間に約60万人に带状

疱疹の発症があり、50歳以降で増加し、特に70歳代で発症率が高くなり80歳までに3人に1人が带状疱疹になるとい

う報告もあります。なお水痘については2014年、水

痘ワクチンが、1歳から3歳未満の子

どもに対し2回接種する定期接種になり、それ以降水痘に感染する子供が大きく減っています。

▽症状

带状疱疹の症状の多くは、まず初めに、皮膚に神経痛のような痛みが起こります。痛みは、皮膚の違和感やかゆみ、しびれとして感じる程度から、針で刺されたような痛みや焼けるような

痛みまで、さまざまです。

その後、水ぶくれを伴う赤い発疹が带状に現れ、徐々に痛みが強くなり、眠れないほど痛むこともあります。

▽感染後の神経痛の持続で日常生活に支障

さらに、带状疱疹発症後3〜6カ月以上、場合によっては年単位で痛みが続くことがあり、痛みにより、家事ができない、仕事に集中できない、眠れ

神経痛で生活に支障 ワクチンで予防可能

ないなど、日常生活に支障をきたしてしまう。

この神経痛は50歳以上の感染者の5人に1人に起き、年齢が高くなればなるほど苦しむ方が多くなります。

また、さまざまな神経に障害を起こすため、顔面では麻痺、眼では失明、耳では難聴となることもあり、決して油断できない病気です。

▽繰り返し発症

厄介なことに、带状疱疹は一度発症したら二度とかわからないわけではなく、約6%の割合で繰り返し発症することがあります。带状疱疹にかかると、その原因となる水痘・带状疱疹ウイルスへの免疫ができません。しかしその後、加齢や疲労、ストレスなどによって免疫力が低下すると再発することがあります。

▽治療

带状疱疹の治療は、その原因となるウイルスの増殖を抑える抗ウイルス薬と、痛みに対する痛み止めが中心となります。带状疱疹は水ぶくれにウイルスが含まれているため、人から人への感染は基本的に接触感染です。しかし症状が体のさまざまな場所に出ている重症の患者や、免疫がとくに低下している患者は、ウイルスが気道粘膜で増殖し、空気感染するとされています。そのため入院して個室での管理となります。

▽感染と神経痛の予防にワクチン接種

2020年1月に、带状疱疹ワクチンが認可されました。ただ現時点では、50歳以上が対象で、接種も任意で自費となっています。

2回の接種(通常2回目は1回目の2カ月後)をすることで、带状疱疹の発症予防効果は50歳以上で97・2%、带状疱疹後神経痛に対する予防効果は88・8%とかなり効果の高いワクチンとなっています。気になる方はかかりつけ医に相談してみましよう。

宮崎県の年代別の带状疱疹の発症率(1997~2011年の平均)を示すグラフ。縦軸は1年間の1000人あたりの発症人数(国立感染症研究所のホームページの資料をもとに作図)

